

## 決して失望に終わることのない希望

池田 豊

ある青年がシナリオ・ライターになる夢を抱き、自作の原稿をハリウッドのプロデューサーの所へ持って行きました。ところが、何度足を運んでも、「君の作品は、訴えるものがない。ダメだよ！」と言われるばかりです。50人を越すプロデューサーから拒否され、「君はシナリオ・ライターになる才能を全く持っていないよ！」と失格者の烙印を押されます。「君、時間の無駄だよ！」とさえ言われ、全く相手にされないのです。

この青年は、出生時に医者医療ミスにより、顔面の左側、特に唇、顎、舌の神経が傷つき、麻痺を起こしました。それが原因で、言語障害を持つようになりました。口元が少し歪んだ容姿、そしてそこから生じた劣等感により、卑屈になってしまった性格は、常に周囲の友達から馬鹿にされ、いじめの対象となっていたのです。

12歳の時に両親が離婚したことを切っ掛けに、彼は次第にグレだしました。小学校から高等学校修了までに14の学校から追い出され、放校処分を受けています。演劇に興味を持ち始め、マイアミ大学の演劇学科に入学しましたが、授業料が支払えなくなり、2年で中退。故郷のニューヨークに戻り、本格的に俳優を志します。しかしオーディションを受けるたびに不合格です。なんと54回もオーディションに落ちています。しかし、彼は、自分の夢を棄てませんでした。ハリウッド中のプロデューサーたちから「君には全く望みはないよ！」と言われても、彼は、あきらめませんでした。

そして、やがて、たった三日間で書き上げた一つの作品をあるプロダクションに持ち込んだのです。その時、なんとそれが不思議にも評価されたのです。脚本家であった青年自らが、主役をも演じ、映画になりました。その作品は、「ロッキー」という題名でした。そうです、大ヒットし、第49回アカデミー賞・作品賞を獲得した、あの「ロッキー」です。青年の名は、シルベスター・スタローンです。

シルベスター・スタローンは、クリスチャンではないかも知れませんが、私たちはクリスチャンでない方々の人生からも、多くを学ぶことができます。私たちが他の人々から「あなたには才能がない」とか、「あなたは駄目な人だ」とか言われ、決めつけられるようなことがあっても、映画「ロッキー」とシルベスター・スタローンは、私たちに創造して下さった造り主は、すばらしいタレントを私たち一人一人にお与えくださっているのだという事実の一例となっています。私たちは、創造主を信頼し、与えられているタレントを生かし、希望をもって歩み続けたいものです。今朝は、ローマ書5章から、「決して失望に終わることのない希望」について教えられたいと思います。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ローマ書1~8節

### I. ベートーヴェンの苦難と失望

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は、誕生の時から苦難を背負っていました。幼い時は、アルコール依存症の横暴な父親に、無理やりピアノを習わされ、子供らしい時期は、ほとんどなかったようです。外見も粗野で、恐ろしく荒っぽく、ぎこちない人物だったようです。そんなベートーヴェンが、一人の素敵な女性に出会います。ジュリエッタという女性です。二人はたちまち恋に落ちました。ベートーヴェンは、ジュリエッタのためにある曲を作曲し、彼女に捧げました。「月光」という曲です。ところが、ベートーヴェンにまたしても不幸が訪れます。ベートーヴェンが三十才頃のことです。彼があればほどまでに愛したジュリエッタが、ベートーヴェンとは別の男性と結婚してしまったのです。ジュリエッタのお父さんが、ベートーヴェンは貴族出身の家柄ではないからという理由で、彼とジュリエッタとの結婚を許可しなかったからです。

彼は一生独身で通しました。しかし、好んでそうだったというわけではありませんでした。何人もの違った女性に恋をしたのでした。しかし、誰もが、彼の音楽的才能を称えはしましたが、ベートーヴェンから恋心をよせられた女性たちは、彼の風変わりな性格の故に、結婚生活に対して不安を覚えたのか、あるいは結婚相手がベートーヴェンだと想像しただけで、彼女たちの抱いていた結婚の夢がガラガラ音を立てて崩れるそんな危機感を抱いたのでしょうか、彼の恋はいつも片思いでした。

そのような精神的苦悩に追い打ちをかけるかのようにして、彼の人生を決定的に不幸のどん底へと落とすかと思える大変な試練が、押し寄せてきました。その悲劇的な試練とは、音楽家にとって、最も大切だとされる聴力が失われてきたことでした。難聴の悪化です。失恋、そして音楽家にとって命とも言える耳が、だんだん聞こえなくなってくるつらさ。この二つの出来事は、ベートーヴェンを絶望の淵にたたき落としました。この苦痛と屈辱に、ベートーヴェンはある時、耐えきれず、あわや自殺しかけたほどです。彼は自殺を決心し、遺書まで書いたのです。そして、死ぬ前に今一度、とピアノに向かいました。彼は、恋い慕うジュリエッタのために作曲した「月光」を静かに弾き始めました。ジュリエッタとの思い出を回想しつつ、きっとベートーヴェンは、涙で頬を濡らしながら「月光」を弾いたに違いありません。ところが、弾いているうちにベートーヴェンは、不思議な感覚をいただきました。自分が弾いているピアノの音はよく聞こえないのに、心の中では、はっきりとメロディーが流れてくるのがわかるのです。

ベートーヴェンは再び立ち上がりました。そして、心の中で不思議に鳴り響くメロディーを楽譜に書きとめ、ある曲を作曲したのです。これが交響曲第五番「運命」です。「運命」といえば、「ジャ・ジャ・ジャ・ジャーン」で有名です。この交響曲第五番の冒頭に響く主題のことを、ベートーヴェンは、次のような言葉で表現しました。

「運命が私の部屋のドアをノックした。・・・母の死、かなわぬ恋、そして耳の病氣。望んでなどないことが、次々に押し寄せてくる。」

「あきらめるものか。次々に押し寄せてくる運命に負けてなんかいられない。」

「運命が僕の部屋をノックして、不幸が次々にやってきたけれど、でも僕は運命に負けたりはしない。まっすぐ立ち向かって行くのだ。」

ベートーヴェンは、寄せ来る波のように次から次へとやって来る悲運に、打ち負かされることはなかったのです。ダメージがなかったというわけではありません。悲運に見舞われるたびに、彼は、もはや回復不可能かと思われるほど落ち込んだのです。しかしながら、ベートーヴェンが、常人と違っていたところは、人一倍落ち込んでも、彼はそのたびに、生きる気力、そして作曲する意欲を取り戻したことです。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。1ペテロ4:12-13

### II. ベートーヴェンの信仰と希望

1802年、弟へ宛てた手紙の中で、ベートーヴェンは、その難聴になった苦しい心情を吐露しています。

「他の人に向かって、『おい、大声でしゃべってくれ！叫んでくれ！何を言っているか聞こえないじゃないか！』などと言えるわけがない。・・・それがどれほど屈辱的なことか。」

しかし、ベートーヴェンが試練の中でも希望を失っていないことは、有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」の中で、聴覚を失った彼が、なお、心の奥底に希望と夢を抱いていることについて記している、下記の文章からも明らかです。

「全能の主よ。あなたは、私の胸の奥にある、私の魂をのぞかれ、私の心を見抜いておられます。私の心の内に、人類への愛と、善をなしたいという要求とが満ちているのを主よ、あなたはご存じです。」

実際、ベートーヴェンは、他人を思いやり、無骨ながらも、他人の苦しみに同情を寄せる、優しい心を持った人でした。ヨハ

ン・セバスチャン・バッハの娘が、ただひとりぼっちの老女となっていることを知ったベートーヴェンは、すぐさま、彼女のために、新作を出版することを申し出ています。

ベートーヴェンの日記や手紙、筆談用の会話帳には、創造主への熱烈な信仰に言及する文章が、豊富に書き記されています。彼の創造主への確固たる確信は、次のような表現にも見いだすことができます。

「世界を形成している原子の配列は、偶然によるものでは決してない。宇宙の構成に秩序や美が反映されているのであるから、そこには創造主がおられるのだ。」

日記のいたるところにも、次のような彼の熱心な祈りの言葉が書き記されています。「主よ。どのような方法でもよいです。あなたに私の心を向かわせてください。」

1810年に記した手紙の中で彼は、子供のような信仰心を次のように書き記しています。

「僕には、友がいない。ひとりぼっちで生きていかなければならない。だが解っている。創造主は誰よりも僕の近くにおられるのだ。・・・どんな時でも、このお方が僕と共におられることがわかる。そして僕は、主がどのようなお方かということも知っている。」

友人でもあったルドルフ大公宛ての手紙にはこう書いています。

「他の誰にもまして創造主にお近づきすること。そして、主のみそばから、人々の間に出ていき、創造主のご栄光を宣べ伝えること。これ以上に大切なことは他にありません。」

苦難に満ちたベートーヴェンの生涯に真の希望を与えたのは、聖書の御言葉でした。彼は、フランス語とラテン語の聖書をよく読みました。晩年には、年若い甥と朝、夕ごとにお祈りの時を持っていたそうです。彼の蔵書には、書き込みだらけになった、ルター派の牧師、クリスチャン・シュトアムの著書「自然における創造主の御業の現れ」があります。

バッハもヘンデルもモーツァルトもベートーヴェンもメンデルスゾーンもブラームスも皆、その芸術の基盤に聖書の御言葉がありました。聖書の中には、人生に起こり来るあらゆる問題や悩み、苦悩の実例が述べられており、またそれらに対処する鍵も記されています。良いクラシック音楽を聞きながら、聖書の御言葉を味わうことにより、あなたの人生は、より豊かなものとされるに違いありません。

キリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。ローマ5:2-5a

失望に終わることのない希望があると聖書は言います。

耳が聞こえなくなりだしたとき、ベートーヴェンとて、最初は落胆し、悲嘆にくれたのです。そして、聴覚が全く機能しなくなった時、彼は、一度は作曲という仕事をあきらめようとしたのです。しかし、彼の心のなかには、新しいメロディーが泉のようにわき上がってきます。これをなんとか音符に書き留めておきたい・・・ベートーヴェンは切実にそう思ったのです。耳が聞こえなくなっても、必要な音符が彼の頭の中に響き渡り、刻み込まれていくのです。さらに、かすかながら音の振動は感じられる。口に小太鼓のドラムスティックのような棒をくわえ、その棒の先端をピアノの内部に押し当てながら作曲したという逸話を聞いたことがあります。彼は何度か絶望感に襲われ、挫折感にさいなまれながらも、あきらめず作曲を続けたのです。

1824年5月、ウィーンの劇場で、久々にベートーヴェンの新曲が発表されました。しかもベートーヴェン自ら指揮をすとあって、コンサートホールは聴衆であふれ返っていました。有名な演奏家たちがごぞつて出演していました。演奏が開始され、荘厳で格調の高い、すばらしい曲が演奏されました。演奏が終わると、一瞬の静寂のあと、熱狂的な拍手喝采が、いつ終わるとも知れず鳴り続きました。

ところが、ベートーヴェンは楽団員のほうを向いたままで、聴衆のほうを振り返ろうとはしないのです。その顔には、救いようのない絶望感がみなぎっていました。彼の耳には、嵐のような拍手も歓声も届かなかったため、すっかり失敗だと思い込んでいたのです。とうとう歌手の一人が彼を促して、客席のほうを振り返らせました。こうして、ベートーヴェンは、やっと自分の曲が大成功を取ったことを知ったのです。この曲はベートーヴェンの第九番目の交響曲です。『合唱』という名前で親しまれています。歌詞として用いられたシラーの詩、最後の部分を日本語でお聞き下さい。

抱き合おう、諸人（もろびと）よ！ この口づけを全世界に！

兄弟たちよ、この光輝く、星空の彼方に・・・

愛に満ちた、父なる神が住んでおられるに違いない！

何百万もの諸人よ、ひざまづいたか 創造主を感じるか？ 世界よ、

星空の彼方に神を求めよ 星々の彼方に、神は必ず住みたまう！

キリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。ローマ5:2-5a

失望に終わることのない希望があると聖書は言います。

私たちは、苦しみに会うことがあっても、失敗しても、希望を棄ててはならないこと、あきらめてはならないことを聖書から教えられます。そして、そのような信仰を主から与えられるために、聖書に記された創造主の知恵を求めるよう勧められているのです。忍耐を通して私たちに成熟が養われ、創造主の栄光が現されるからです。

ベートーヴェンは試練に打ち勝ち、芸術活動を創造主より与えられた聖なる使命、義務と捉えていました。そこに彼の夢、希望があったのです。ベートーヴェンに不屈の希望を与えたものは、実にキリストによって示された、創造主の愛だったのです。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人がいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ローマ5章1~8節

失望に終わることのない希望があると聖書は言います。

私たちは、信仰によってのみ、義と認められることができます。良い行いによってではありません。もし私たちの良い行いや、パフォーマンス、実績によって創造主のみ前で評価され、合格点をもらえるというのでしたら、私たちの中には、自分の立派さを誇る人が出てきたり、自分よりも成績の悪い人を見下し、裁いたりする人が出てくることでしょう。そのことを創造主はよくご存じで、私たちの救いを報いやご褒美としてではなく、創造主の一方的なご親切と憐れみの故に、どんなでも子供のような素直な気持ちを持つなら、頂くことのできるプレゼントとしてくださいました。このことをわかりやすく説明している聖書の御言葉があります。エペソ2:8-9です。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです。エペソ2:8-9 ローマ書4章にはこう記されています。

もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。働く者のばあい、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。ローマ4:2 テトス3章にはこうあります。

しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。 テトス3:4-5

### III. 決して失望に終わることのない希望の根拠

失望に終わることのない希望があると今朝の聖句は言っています。でも、この希望が決して失望に終わることがないというのは、なぜでしょうか。

先週、いつまでも残るものは、信仰と希望と愛だという聖句を学びました。この中でもっとも優れているものは、何だったでしょうか。そうです愛です。今朝の聖句も同じように、決して失望に終わることのない希望は、創造主の愛に基盤がおかれているからこそだといえます。聖句は、こう続いています。

なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。ローマ5:5b-8

私たちが、お礼口さんになった時、つまり、自分の悪いことを自分で反省し、自己変革や自己改善ができて良い人になった時、神は私たちを愛してくださったと書いてありますか？いいえ、そうではありません。私たちがまだ罪人であった時、つまり、私たちが、神などいるものかと自分勝手に我が儘放題生きており、神につばを吐きつけるかのように、不遜な態度を取っていた時というのです。

私たちが「弱かった時」と日本語に訳された言葉は、アスセネスという原語です。これは、ニューリピングトランスレーションがWhen we were utterly helplessと翻訳しているように、私たちが完全に助けようもない、救いようもない状態の時という意味です。

創世記の冒頭に「はじめに神が天と地を創造された」とありますが、日本語では単数、複数の違いがはっきりわかりません。英語では、God created the heavens and the earth. です。ヘブル語には、単数形、二つの複数形、そして三つ以上の複数形があります。この原語では、天は三つ以上の複数形が用いられています。パウロも、第三の天まであげられた人という表現を用いていますから、天は三つあるのです。チョウチョやトンボが飛んでいるお空が第一の天です。月や太陽、アンドロメダ星雲がある宇宙空間が第二の天です。そして第三の天が、聖い創造主のおられるところなのです。

ところで、皆さんの中で、自分のジャンプ力だけで、東京タワーのてっぺんをさわってこれる人はいますか。いませんね。では、自分の力だけで、土星の周りにある輪にさわって帰って来れる人はいますか？第一の天、第二の天の高いところにさえも行けない私たちが、自分の力だけで、第三の天、天国に行けるはずがない。そんな人は一人もいません。聖書は言っています。これが、ここで言われている、私たちが弱かった時、完全に自分の力では、自分を救うことが不可能だった時という意味です。

「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。」

聖書はそう言っているのです。私たちにできなかったことをイエスさまが成し遂げてくださいました。In Christ と聖書は表現していますが、丁度、スペースシャトルのようなイエス様という乗り物に乗せていただく時、私たちは、どんな人でも、少し体重オーバーかなと心配している人でも皆、第三の天にまで連れて行っていただけるのです。ここに創造主の愛が表されている、英語ではデモンストレーションされているというのです。

刑務所での伝道活動に長い間従事していたビル・グラスという宣教師によると、刑務所に入っている囚人の人々には、両親から絶えず告げられていた共通の言葉があるそうです。なんと90%の囚人たちが、「お前のようなやつは、きっと監獄で死ぬぞまにまにに違いない！」と馬鹿にする言葉、否定的な言葉を聞かされていたそうです。

冒頭に申し上げた、シルベスター・スタロンの例にも見るとおり、あなたや私にとって何よりも重要なことは、他の人々がくだす評価ではありません。聖書を見ると、あなたや私にとって何よりも重要なことは、人々からの評価ではありません。私たちがなす行為そのものや、実績でさえもありません。そうではなく、あなたや私が、自分自身であるという、ただそのことだけのゆえに、つまり、「汚れた、恥ずかしい、そしてみっともない、弱さをもった、ありのままの私たちに對して、創造主が、どれほどの愛とご配慮を注いでくださっているかということ、知ること」なのです。そして、その創造主のご愛と、その情け深さに気づき、信じ受け入れ、どれほど感謝しているかということこそが、重要なことです。この「愛と赦しに満ちたイエス・キリストにあっては、私たちの惨めな失敗や、弱さは、少しも不名誉なことではない」ということを私たちは知らねばなりません。もちろん、失敗したら、感謝をするということとはなかなかむずかしいでしょう。成功したら、私たちは、比較的容易に自分を誉める気持ちになります。失敗すれば当然、自分を卑下する気持ちになり、自分を誉める気にはなりません。けれども、私たちは、自分が失敗することがあって、造り主を誉め称え、恵み深いイエスさまを讃美することは、できるはずなのです。私たちが惨めであればあるほど、イエスさまの素晴らしさが讃美されるのです。栄光はすべて主に帰されるのです。「恥は我がもの、栄光は主のもの」という言葉が私は好きです。失敗は、少しも不名誉なことではありません。失敗した後、再度挑戦することをあきらめてしまうことの方が、不名誉です。

1652年に両眼を失明、盲目となってしまったにもかかわらず、その6年後に、ジョン・ミルトンは、偉大な文芸作品「失樂園」を書き始め、「復樂園」、「闘士サムソン」などを全て、口述筆記で完成させていきました。そして、神への信頼に基づく「忍耐」の重要性と、敵の矛を砕き、敵の光を消滅させたのです。信教の自由を訴え、墮落した当時のローマカトリック教皇制度の腐敗を糾弾した彼は、敵対者たちから「お前の失明は、天罰だ」とあざ笑われました。しかし彼は、「視力を失うという最大の逆境に厳然と耐え、神の恵みによって乗り越えている自分は、絶対に不幸ではない。惨めではない。私は勝利者である！」とその信仰を表明していたそうです。

音楽家として致命傷ともいえる、聴力を損なっていたにもかかわらず、ベートーベン第九交響曲「合唱：歓喜の歌」を完成させたのです。

アメリカの作家、メルヴィル(1819-1891)という人は、次のような言葉を残しています。

不遇(不幸に思える出来事)とは、ナイフのようなものだ。

ナイフの刃をつかむと手を切るが、把っ手をつかめば、役に立つ

どんな苦難に見舞われることがあったとしても、また、数多く失敗と敗北の連続を経験しても、私たちは、希望を失ってはなりません。創造主が、私たちを愛してくださっているからです。主の御恵みに目を留めましょう。人間的な限界を超えた、思いもよらない素晴らしい祝福が用意されていることを、聖書は告げているからです。

イエス・キリストが十字架について死んでくださったのは、あなたの罪を赦すためでした。そして、キリストは墓に葬られた後、三日目に死から甦り、今、あなたに永遠の命をプレゼントとして差し出しておられます。プレゼントというのは、あげるほうの人が、全額お金をだして買ってくるのです。もらうほうの人は、ただもらいます。ただ「ありがとうございます」といって受け取るのです。

聖書の一冊最後の書、黙示録にもこのように記されています。

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しきものもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。黙示録21:3-6

「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会について、これらのことをあなたがたにあかしした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。黙示録22:16-17

いかがでしょうか。この素晴らしい神の愛をあなたも御自分のものとさないませんか。キリストを救い主として信じ、創造主に「ありがとうございます」と申し上げませんか。以下の祈りをどうぞ、あなたも創造主なる神に向かって、声に出して祈ってみて下さい。

#### イエスキリストを信じ受け入れるお祈り

天の神様、私はわがままでした。あなたに対して罪をおかし、他の人を傷つけ、自分も傷つきました。こんな私が裁かれてあたりまえなのに、罪のないイエス様が、十字架で血を流し、私の罪をつぐなって下さったと聞きました。また、死からよみがえり、永遠の命をプレゼントして下さることありがとうございます。今、私は、イエス様を私の罪からの救い主、永遠の命の恩人として信じ、お受け入れします。こんな私ですがどうぞ宜しくお願いいたします。 アーメン

もしあなたがこのお祈りを心からお祈りになられたら、聖書の權威によって申し上げます。あなたのすべての罪は赦され、あなたは創造主の愛の家族の一員として加えられました。新しい歩み、新しい人生がスタートいたしました。

#### アクション・ポイント(生活への適用)

1. ベートーヴェンの苦難と失望についてどう思いますか。あなたも似たような経験をしたことがありますか。他の人と語り合ってみましょう。
2. ベートーヴェンの信仰と希望についてどう思いますか。あなたも「決して失望に終わることのない希望」を自分のものとしたいと思われませんか。
3. 「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」という聖書の御言葉についてあなたはどう思われますか。この創造主の愛をあなたは、もうご自分のものとして信じ受け入れられましたか。